

- ▶ “第20回モリサワ文字文化フォーラム「筆蝕と曲線」”ダイジェスト
- ▶ 世界漫遊記：Typographics 2017
- ▶ フォント あ・ら・かると：「モアリア」
- ▶ メンズDTP!!：IllustratorとInDesignの使い分けについて
- ▶ イベント情報

今月の
フォント

- 本文：太ミンA101
- 見出し：シネマレター



www.morisawa.co.jp/about/morisawa-news

“第20回モリサワ文字文化フォーラム「筆蝕と曲線」”ダイジェスト

2017年6月13日、第20回モリサワ文字文化フォーラム「筆蝕と曲線」が開催されました。

圧倒的な書の表現世界を持ち、書を通じて現代を鋭く読み解く石川九楊氏と、タイポグラフィを基軸としたさまざまなデザインプロジェクトで活躍される大原大次郎氏を招き、「書の表現」をテーマにそれぞれご講演いただきました。「黒板とチョーク」、「朗読」といったこれまでにない手法が用いられた、印象的なフォーラムを紹介します。

モリサワ
文字文化
フォーラム

第一部 曲と線 — 大原 大次郎 氏 —

デザインワークや映像制作に従事するほか、ワークショップやパフォーマンスを通じて、言葉や文字の新たな知覚を探っている大原大次郎氏は、この日緊張した面持ちで登壇。大原氏が非常に衝撃を受けたと語るのは、ブックデザイナーであり、タイポグラファーでもある平野甲賀氏の「僕の字はラップのようなものだ」という言葉。「文字には形がある。そして、リズムがあって、呼吸があって、抑揚があって。声に出した時の音調、口触りやキャラクター性などが含まれている。形の中に声があり、人それぞれのリズムやフローがある」という視点から文字を解釈することが、大原氏の制作の糧になっている。また、「人が持つ、話し方、間合い、うなずき方、聞き方、見方、考え方といった“クセ”を肯定していくことを考えるようになった」と話し、自身が行うワークショップを紹介。同じモノを見ている、見る箇所と描いていくクセは人それぞれだとし、「それぞれのクセ、ズレというものを楽しみ、それを文字の世界、絵の世界へ転化できないかと考えている」と語った。

次に、「目ではなく、耳を澄ませてください」と、十数人のさまざまな人が“こんにちは”という録音を、続けて“大原大次郎です”という録音を流した。「固有名詞を話しているのは誰か、というのを決定づけるのはもちろん名前だが、声色、キャラクターなどが異なれば、名前を越えたり、壊したり、意味を剥奪することも起こりうる」と解説。さらに、道具にもクセがあるといい、「身体に馴染むもの、刷

染まないもの、ものづくりをするうえで、道具の呼吸、間合い、クセと付き合っていくことはモノをつくる過程においては必ず生じる会話だと思う」と話し、「鉛筆」「ペン」「筆」「チョーク」「万年筆」という五つの「文字を書く時に生じる道具の声」を流した。「それぞれに音があるのは当たり前だが、こういう音を聞きながら文字を書いているわけで、音を感じながら、つまり、手と現れてくる文字と会話しているというように思っている」と話しながら、パフォーマンスへと進んだ。

大原氏の「声で描くタイポグラフィ」という音声パフォーマンスは、普段ラッパーのイルリメさんと音楽家の蓮沼鞆太さんによる3名のバンドで行っているが、今回は初の独演。3人で作った『曲と線』という詩を、音楽ソフトで曲に落とし込んだという。そのアレンジは、順番通りに読まない、読み方もいろいろ、さらに切り刻んでいる、など。一風変わった朗読になりそうだと、会場は大原氏の世界へと誘われていった。

1回目は、リズムが刻む朗読。5分ほど耳を澄ませていると、「歌としゃべりと朗読、それぞれ境目があると思う」と話し始めた大原氏。人それぞれの言葉がずれ込んできて、言葉の意味が崩れていくのだ、と解説した。「文字を書いているのではなく言葉を書いているとすると、言葉そのものにも意味が強くなっていて、言葉にも重みがあって、自分はその重みに向き合っているのかと考えるし、文字の重さに言葉の重さが含まれていると感じる。



▲大原 大次郎 氏

ロゴマーク一つとってもその重みが含まれていると思う」と深い思いを語る。続いてメロディが加わり、音楽性が少し入っているという2回目の朗読へ。終えて大きな吐息を漏らし、「よくできた俺。頑張りました……」と呟く大原氏に、会場からは温かな笑いが起こった。ここで、人には伝える時のクセがあり、伝え方一つとってもまったく違う、ということを実感してもらうためのワークショップ『誘導画』を紹介。これは、画像を見た人が見えない人に、言葉と身振り手振りだけで絵を説明するもの。繰り返すことで伝え方が上達し、そのことで絵の精度が上がっていくという。「言葉の精度でグラフィックの精度が上がっていくのだから、チームで何かを行っている人たちは、伝え方の細やかさが上達していけば、よりうまくやっていけるはずだ」とし、さらに音楽性の強い3回目の朗読へと進んだ。

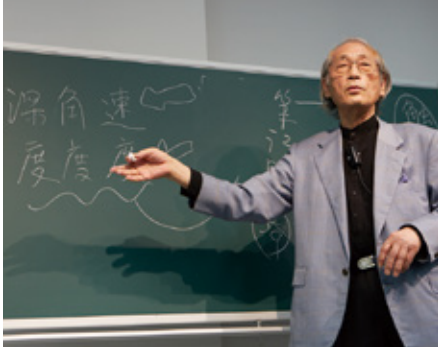
会場からの拍手に「初めての試みをこんな舞台ですということもあるでしょうが、嬉しいです。

ありがとうございます。声を発するというのは勇気がいると改めて思いました」と大原氏。「今回は難題でしたが、苦手だからと遠ざけていると、描く方でも何かがこぼれ落ちていくようにも感じていて。文字の骨みたいなのを探っていくとき、いざ骨を

探ろうとすると、骨って生きている限りなかなか触れられないモノで、気配というか、感じ取るしかできないものですが、それが重心だったり、身体のバランスだったり、核をつくっているとすれば、文字の中にある声や骨を探っていかなければならぬ

と感じる。普段やり慣れていることではなく、慣れていないことで、恥ずかしさも含めて感じてもらえれば。現在進行形の私の表現はこういうものだ、というのを感じ取っていただければ幸いです」と締め括った。

第二部 終わりに「書」の表現世界 — 石川 九楊 氏 —



▲石川 九楊 氏

現代芸術の最前線で創作活動を展開され、「書は筆触の芸術である」ことを解き明かし、書の構造と歴史を探求し続ける石川九楊氏。「書という世界ほどわかりやすいものはないのに、多くの人が敬遠する原因は何なのか。それは、「見方」というものが間違っているから。そこを改めれば、書は誰でも覗ける、単純明快な世界。字というのは、ほとんどの人がほぼ日常的に接している、わかりやすい表現なのだから」と、壇上に用意された黒板の前に立った石川氏は、白いチョークを手に「書がわからなくなる三つの見方」について語り始めた。

第一に「うまいのか、へたなのか」と書に接近すること。これは表現の世界ではなく、小学校の低学年の頃の教育の進度、学習段階についてのものであって、書のことではないという。第二に「なんと書いてあるか」と考えること。書というのは「どのように」書いてあるのかを見るのが重要であり、言葉をどのように書いているのかが根幹だという。「どのように」というのは、言葉を書き進めていく『速度』『角度』『深度』のこと。書き進む力、つまり一筆一筆の力がどのように振る舞うか、のこと」と石川氏。良寛の「山」という字を例に実演した。筆先で入り、宙に高く逃げ、軽く着地し…と、手を筆に見立て、そのプロセスを示しながら、この姿が良寛の書の姿だと解説。「この黒板、僕のためにモリサワさんが購入してくださったんですよ」と会場の笑いを取りつつ、黒板を波線で表現し、その上にあるチョークの絵を描く。チョークは黒板に削り取られ、ここに『触覚』が生まれるのだと述べ、「筆記具と対象、この触覚的関係が、どのように速度的、角度的、深度的に展開していくかというのが書の世界だ」と論じた。「なんと書いてあるかわからなくても、その書きぶりのなかに、その人がどのように振る舞っているかが見えれば、書として

鑑賞できる。それは簡単なこと。なぞればよい。なぞれば、その書きぶりはわかる」と石川氏。

第三は「造形的に見ない」こと。「見るべきは、書いていく力が大きく伸びていっているのか、萎縮して小さくなっていっているのか、強く奥に向かっていっているのか、軽く書き流して次へ進んでいるのか、そういう姿、プロセスを見るのが重要で、つまりなぞればよいのだ」と繰り返す。

これを実践しようと、スクリーンに代表的な楷書、『九成宮醜泉銘』と『雁塔聖教序』の二つを映した。「指でなぞって、どういう筆触かというのを感じ取って書いてみると、リアルにその差がわかる。読めなくてよい、一画だけでもなぞってみれば書は見えてくる。書というのは、触覚をベースとした芸術であって、筆記具の先端と対象との間に生じる触覚、その手応え、手触り、そういうものがどのように展開しているかを見るもの」と熱く語る。「絵のように見る今までの常識を捨て、触覚的な、手触り的な、筆触的な観点から見れば誰でもわかる。自分で筆をもつ機会が増えれば増えるほど、さらによくわかるようになる。このことを導入として理解いただいたら嬉しい」と、作品紹介へ移った。

作者たる石川氏も初めてお目にかかるという作品が、7月5日から上野の森美術館で開催の「書だ！石川九楊展」で展示される。そのうちの一つ、すべてつなぐと85mという大作が、37年前に書かれた『エロイエロイラマサバクタニ又は死篇』。言葉が時代とともにある一つの表現として書があるためには、いかにも書だという書らしさ、書の情緒にもたれかかる「白い紙に黒い墨で何かよい言葉を書く」という表現では納得できず、「ここに本当に言葉が書かれてある」という世界を表現するために、グレーに染めた紙に淡墨で、詩ではなく言葉の断片をコラージュすることによってひとつ

の世界を描き出す作品づくりを始めたという。書にだってこんな姿が描ける、と10年間続いた作品づくりだが、「次々にできあがることは退廃である」と考えるようになった。むしろできていないものを探し、それをなんとかしようとするところに作家の力が発揮されると考えた石川氏は、白い世界へ戻ることにした。「一度、灰色の世界をくぐって戻った白い紙は、白には違いないが、ただ単に思わせぶりの世界をつくる白ではなくなっている。書きぶりも変化した。速度を限りなく遅くすると、時間というものをも自分で自由に操れるようになる」「書が現代の人の表現になるためには、デザインのような姿をしていかまわらないところへ至った」「ゆっくり書くことで時間と空間は繋がっているということが見えてくる。デザイン的な方向へ、次の段階へと開放され、そういう可能性にまで書は拡がっているのだ」と力説し、次々と作品について解説。石川氏は、「文字が奇妙な形になって、自分でも痛々しい状態だと思うが、そういう状態になることによって、初めて今の時代を捉える姿になるとするならば、読めることは犠牲にさせてもらって、こうならざるを得ない。それは時代が悪いと思う。もう少し率直な時代になれば、字も、もう少し誰もが読める形で現れてくる。それは間違いなく」「書の理想は、誰もが普通に字を書き、そのどれもが美しい。そういうゴールが書にはある、というのを目指してやっている。いわゆる今ある書道の姿ではなく、書というものを開放してやると、まだまださまざまな可能性があり、自由にやれる余地があるということを感じ取ってもらえれば嬉しい」と結んだ。

そして、フォーラムは最後の質疑応答へと移り終了した。今回の大原氏の録音を流す「朗読」と石川氏の「黒板とチョーク」による表現は、印象に残る新しいスタイルだったといえるだろう。



今年のTypographicsは、昨年同様ニューヨーク市イーストヴィレッジに所在するCooper Unionにて開催されました。大会は、描画やコーディング用ソフトウェアの開発者による使用解説と実践、タイポグラフィに特化した共有デザインスペースの見学、夜のニューヨークの街を彩る40-50年代のネオンのガイド付き散策など多種多様のイベントで構成された「Workshop & Tours」、メインカンファレンスやワークショップの内容を講演者へのインタビューやデモンストレーションなどでさらに深掘りする拡張教室「TypeLab」、そして厳選された登壇者による「Main Conference」の3部で構成されています。

今回の大会を端的に表している、いくつかの講演内容を紹介します。

Natasha Jen 「書体はキャンパス」

Jen女史は、世界的に有名なデザインコンサルティング企業Pentagramに所属するデザイナーです。講演の趣旨は、「デザインはキャンパス(ページ、壁、空間)に存在するもの。そのキャンパスの定義にどれだけフォントが影響をし、デザイン空間を満たしていくか」。キャンパスありきの既存の枠組みやアプローチに対して、物事の本質を見極める課程やインスピレーションの泉を自身のこれまでの作品を例に展開され、1つの

デザイン作品を制作する際のフォントの役割や関与の重要性が説明されました。どれも逆転の発想に溢れるもので、改めて、コンテキスト(背景)を分析することで、フォントとデザイナーの間で起こる化学反応の効果の大きさを感じました。

Jonathan Key 「増幅するためのデザイン」

Key氏は、同性愛とトランスジェンダーのコミュニティに焦点を当てて、コミュニティの声を増幅し、より高めるための手段としてのデザインについて語りました。

今日における人種に関連した緊張の高まりや抑圧的な社会構成においては、“特殊”とカテゴライズされてしまうコミュニティの声が届きにくい現状があります。コミュニティの声を見えるようにするためには編集からブランディングまで戦略を練り、実行する強さが必要だと説きます。物語を紡ぐこととジャーナリズムが融合した雑誌やQTPOC(Queer & Trans People of Color 有色人種の同性愛とトランスジェンダー) 集団を通じて制作された作品を紹介しました。

Key氏登場の際には、大きな歓声と拍手で迎えられ、QTPOCやLGBTに対するクリエイティブ・プロフェッショナル達のスタンスを垣間見ることができました。

Ilya Ruderman 「今日の書体」

Ruderman氏は、モスクワをベースに書体とグラフィッ

クデザインを教えながら、フォントファウンダリ「Type Today」を運営しています。グラフィックデザインの中でのフォントをトピックに扱う登壇者が多い中、真摯にフォントの現在地と未来予想図についての構想に集中し、「何を持って現代的な書体とみなすのか」「現代的な書体の定義」を、意匠ではなく、搭載される媒体(VRやAR)から逆引きされて開発されるべきだと提案しています。その新しい書体に向けた新しいユーザの模索についても問題提起しました。

切っても切り離せない書体と科学技術の側面を露わにしながらも、書体を介して達成される本質や背景を見ることの大事さも啓蒙する内容でした。



昨年は、教育・ビジネス・タイポグラファーなど書体そのものに着目した講演内容が多い構成でしたが、今年は、比較的若い登壇者が多く、LGBTや多様性、書体をデザイン要素の一部として展開されるコミュニティ形成や美学を意識したプロダクトコンテンツの紹介などでラインアップされ、タイポグラフィが持つ多様性がどのように社会とリンクしているかを間近で感じられる大会でした。

Typographics 2017

<http://2017.typographics.com>

永 フォント あ・ら・かると

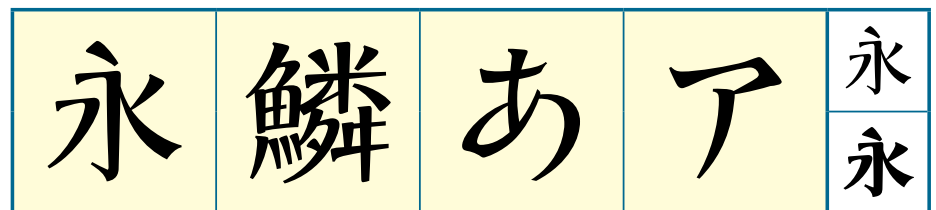
モアリア

「フォント あ・ら・かると」では
毎号、ひとつのモリサワ書体を
ご紹介します。

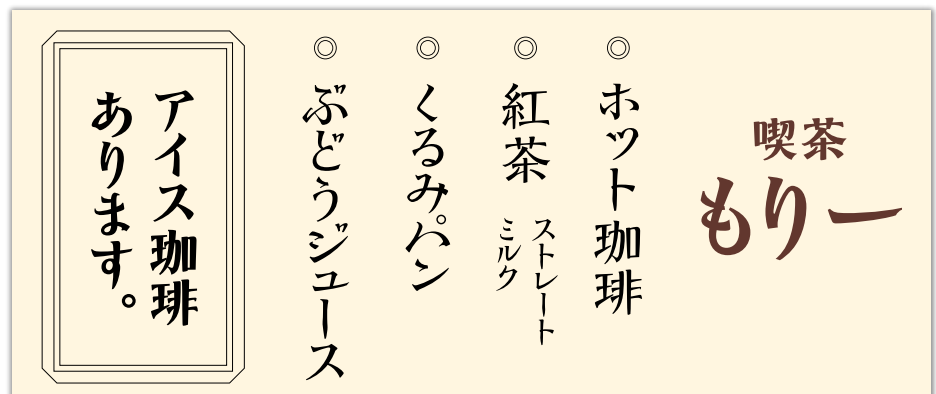
スタイリッシュな運筆感のある書体を求めるあなたへ、今月のあらかるとは、自由なエレメントをもったオリジナル書体の「モアリア」をご紹介します。

「モアリア」は万年筆で書いたような特徴を持つ手書き風デザイン書体です。縦・横画の太さは明朝体に近いコントラストがあることによって、親しみやすい印象を与えます。横画やハライの先などは押さえを控えた軽いタッチにまとめ、散り消えていくような優しいイメージを持たせています。

堅牢で潔い筆使いは力強さを感じさせながら、それと同時に、流れるように優しく柔らかい運筆によって、組んだ際には文章に優雅なリズムを生み出します。強さと柔らかさを併せ持つオリジナリティのあるスタイルは、タイトルやコピーをはじめ、小さなサイズでは表情豊かな手書き風の表現も可能です。RとB、2種のウエイトで提供しております。



●使用例



「モアリア」は、『MORISAWA PASSPORT』をご契約のお客様はいつでもインストールしてご利用いただけます。
『MORISAWA Font SelectPack 1 / 3 / 5』、および Web フォントサービス「TypeSquare」でもご利用いただけます。

イケテル&ルーキーの メンズDTP!!

イケメンの「イケテル先輩」と
勘違い系新人「ルーキー君」のドタバタ制作室

今回のテーマは — IllustratorとInDesignの
使い分けについて

ルーキー：うあー！もう嫌だ！

イケテル：な、何だ、どうかしたのか？

ルーキー：今度のリーフレット、Illustratorで作り始めたんですけど、縦組みで二桁の数字が多いので縦中横を一つずつ設定しないとイケなくて…。面倒くさすぎるっす！



イケテル：ああ、InDesignだと**自動縦中横**の機能があるが(図①参照)、Illustratorにはないから…。IllustratorとInDesign、両方使える環境だとどっちで作った方がいいのか迷うことがあるよな。どういう時にInDesignを使った方がいいのか、ポイントがいくつかあるから教えてやろう。



ルーキー：おおー！それ、かなり知りたいっす！

■IllustratorとInDesignの使い分けのポイント

イケテル：まずは基本だがInDesignはページ機能があるから、**ノンブル**、**柱**、**目次**などの設定ができる(図②参照)。Illustratorでもアートボードを複数設定してページ物を作ることは可能だが、ノンブルや柱、マスターページの設定がないからページに共通するパーツなどは各ページごとに手入力する必要がある。

ルーキー：ページ物ならやっぱりInDesignっすよね。あ、あと表があったらInDesignにします！

イケテル：そうだな、IllustratorになくてInDesignにある機能の代表といったら**表の機能**だな。Illustratorで表を作ろうと思ったらタブ機能やら罫

線を駆使して作らないといけなから、かなり手間がかかる。

ルーキー：以前Illustratorで表を作ったら、修正がめっちゃ大変だったっす！

イケテル：そうそう、InDesignの表なら行に増減があっても自動的に行が送られるから、修正も簡単だ(図③参照)。あとはテキスト関係の機能でInDesignにはあってIllustratorにはないものがたくさんあるぞ。たとえば**ルビ**、**斜体**、**段抜き**と**段分割**、**先頭文字スタイル**、**正規表現スタイル**なんかがそうだな。とくにルビが多ければInDesignで作った方がいいだろう。



ルーキー：なるほどー。

イケテル：あと**アンカー付きオブジェクト**もInDesignにのみある機能だな(図④参照)。

ルーキー：それよく使います！テキストと画像が連動するから修正が楽なんすよね。

イケテル：そうだな。修正のしやすさはミス軽減につながるから重要だ。あとは出力関係の機能だとInDesignには**プリフライト機能**があるから、出力トラブルに関するチェックができる。お前みたいなうっかりした奴には必須の機能だ。



ルーキー：いつもミスが多くてすません…。

イケテル：ははは、最初はそんなもんだ。IllustratorとInDesign、それぞれの特長を理解して、最良の選択ができるようにしておきたいな。

ルーキー：うう、この話もっと早く聞いておきたかったっす！

① 自動縦中横

② ノンブルと柱

③ 表の修正について

④ アンカー付きオブジェクト

イベント情報

創立50周年特別イベント 「JAGAT Summer Fes 2017」

会期：8月24日(木)・25日(金) 10:00-17:30
会場：公益社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)本社
テーマ：デジタル印刷とマーケティングの可能性

HOPE2017

会期：9月1日(金)・2日(土) 10:00-17:00
会場：アクセスサップコ(札幌市白石区流通センター)
テーマ：志あふれる印刷産業へ、期待される価値を求めて

編集後記

梅雨が明け、本格的な夏が到来しました。すでに暑い日々が続いていますが、みなさまは熱中症への対策は大丈夫でしょうか。私が子供の頃には「夕立」が降ったり、道々で打ち水をする姿もあり、帰宅の頃には少し涼しかった記憶もありますが、昨今は昼夜を問わず「ゲリラ豪雨」が各地を襲い、被害も出ているのでご注意ください。この時期、天候だけではなく、仕事への熱中症にも注意して、たまには家族団楽の時間も大切に。

✉ E-Mail: m-news@morisawa.co.jp

発行：株式会社モリスワ 企画・編集：プリンティング事業部 営業企画部
※記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

モリスワ www.morisawa.co.jp
株式会社モリスワ

本社 〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2-6-25 Tel.06-6649-2151
東京本社 〒162-0822 東京都新宿区下高井町2-27 Tel.03-3267-1231
仙台支店 〒984-0051 仙台市若林区新寺1-3-8 Tel.022-296-0421
名古屋支店 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-5-10 Tel.052-201-2341
札幌営業所 〒001-0010 札幌市北区北十条西2-6サウスシティ2F Tel.011-700-0112
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町1-6-27広島印刷会館1F Tel.082-296-1114
福岡営業所 〒812-0013 福岡市博多区博多駅東1-3-25 Tel.092-411-5875
鹿児島営業所 〒890-0051 鹿児島市高麗町11-3 下田平ビル2F Tel.099-252-2255